

クルーズ船感染者の受け入れから、 長期化したCOVID-19対応 －看護管理者として護りたかったこと－

酒井陽子[†]2021年10月23日～
11月20日Web開催

IRYO Vol. 77 No. 2 (100-104) 2023

要旨

国立病院機構長良医療センター（当院）は岐阜県内の岐阜医療圏に位置し、一般病床と結核病床、障害者病床を持ち合わせた複合型病院である。令和2年2月にダイヤモンドプリンセス号での感染者の受け入れを皮切りに、約600人の市中感染者を受け入れてきた。

COVID-19対応が長期化しており、これまでも危機的な局面があった。第2波では、障害者病棟の職員が1名感染し、いつ院内に入り込んでもおかしくない現実に直面した。さらに第3波の拡大では、急激な患者数増で配置の強化が必要となり新たにCOVID-19病棟に配置した職員が感染した。これを機会に病棟の教育のあり方を見直している。その後、増床要請があることを見込み、最大確保病床10床増やし40床としての運用準備と訓練を行ったが、第4波にも危機が生じた。最大43名の患者数となった上、人工呼吸器装着患者を同時に2人看なければいけない時期があり、スタッフの心身の疲弊は相当大きかった。第5波では、重症者が増えた場合の安全な体制として、他の一般病棟の力を活用する準備をした。陰圧整備してある一般病室で、人工呼吸器装着患者が増えた場合に、重症者対応ができるように整えた。

COVID-19対応者のメンタルヘルスの問題は、配慮すべき重要事項であった。終わりの見えない不安感、重症者を見る緊張感、慣れない小児や妊婦対応、看取りの苦悩、さらには対応困難な症例や理不尽さを感じる症例に心が折れるような感情があった。

このような経過の中で看護管理者として護りたかったことを改めて整理した。1. コロナ禍においても、当院の医療を必要とする患者を護ること、2. COVID-19対応による職員を感染から護ること、3. 先が見えない不安定さにある職員の心の健康を護ること、4. 感染対応の実績から得てきた地域の信頼を護ること、5. ポストコロナ、将来の新興感染症との両立ができるための健全な病院運営を護ること、であったと考える。

キーワード COVID-19, 看護管理

国立病院機構長良医療センター 看護部（現所属：国立病院機構三重中央医療センター 看護部），[†]看護師
著者連絡先：酒井陽子 国立病院機構長良医療センター 看護部長室 〒514-1101 三重県津市久居明神町2158-5
e-mail : sakai.yoko.uk@mail.hosp.go.jp
(2022年3月10日受付, 2022年12月2日受理)

Prolonged Covid-19 Management Starting with the Acceptance of Diamond Princess Cruise Ship Infected People :
A Retrospective Report of Maintaining Hospital Function against Crises as a Nursing Manager

Yoko Sakai, NHO Nagara Medical Center

(Received Mar. 10, 2022, Accepted Dec. 2, 2022)

Key Words : Covid-19, management, hospital function, a nursing manager